

あまれ村と伝説の津波について

下地 和宏 (総合博物館館長)

はじめに

宮古の伝説の世界は、琉球王府に報告された『御獄由来記』(1705・06・07年)『雍正旧記』(1727年)、『宮古島記事』(1752年)、それに在番筆者明有文長良の『宮古島記事仕次』(1748年)に見ることができる。いわゆる「宮古島旧記」に収録された伝説は十八世紀の役人が古老たちから聴取して編集したものである。編集者は時代の分け方として「神代」「上古」「中古」という表現を使用しているが、何時頃を指しているのか必ずしも明確ではない。思うに「宮古島旧記」が編集された時期はいわゆる“現代”であり、今日の歴史区分は近世である。「上古」「中古」とは近世以前の世界とみれば、「中古」は仲宗根豊見親の頃で、「上古」は諸按司の争闘に象徴される頃か。「神代」はそれ以前の世界として想定されよう。おおざっぱな時間軸にすれば、現代は18世紀、中古は15、6世紀、上古は14世紀、神代はそれ以前ということになるうか。

『御獄由来記』は「神代」の頃「あまれ(り)村」(以下あまれ村で表記する)が始めて村立されたことを伝えている。ところが、どういう理由によるものなのか、この頃(1700年代)にはすでに廃村となっている。「宮古・八重山両島絵図帳」(1647年)には「あまれ村」は記載されていないので、もし村立されたとすれば、廃村はそれ以前のことであろう。

由来記はあまれ村の前身と見られる弧村が津波で流され滅亡したことを伝えている。ここでいう津波は、いわゆる「乾隆の大波」(1771年)〈「明和の大津波」として知られているが、あえて石碑に刻された名称を使用する〉のことではなく、当然ながらそれ以前に起きた津波である。以後「伝説の津波」として取り扱うことにする。神代の頃の津波と伝えているが歴史的にはどうであろうか。

あまれ村の位置、再興—廃村は何時の頃か。伝説の津波とはどういうものなのか。などについて「宮古島旧記」と考古学調査と併せながら検討を試みることにする。

一、あまれ村の伝説

あまれ村について『御獄由来記』は次のように報告している。

嶺間御獄 男女神あまれ不ら・泊主と唱。

船路の為并諸願ニ付城邊之四ヶ村崇敬仕候事。

由来。昔神代に友利村後あまれ山の下に僅成孤村有り。或夜四海浪あがれ民屋滅亡致シ一村荒原にぞ成にけり。然処あまれ大津かさと申人壱人遁波難、あまれ山の岸の上に草庵ヲ結び只独住居由候。其時大和人平安名崎宮渡と申浜に漂泊致シ、人家を尋行彼大津かさに参逢夫婦の縁をむすび子孫繁昌仕。是より又あまれ村始テ立為申由候。嶺間山は彼夫婦根所と云

伝有崇敬仕候。あまり村ハ今ハ無之候事。

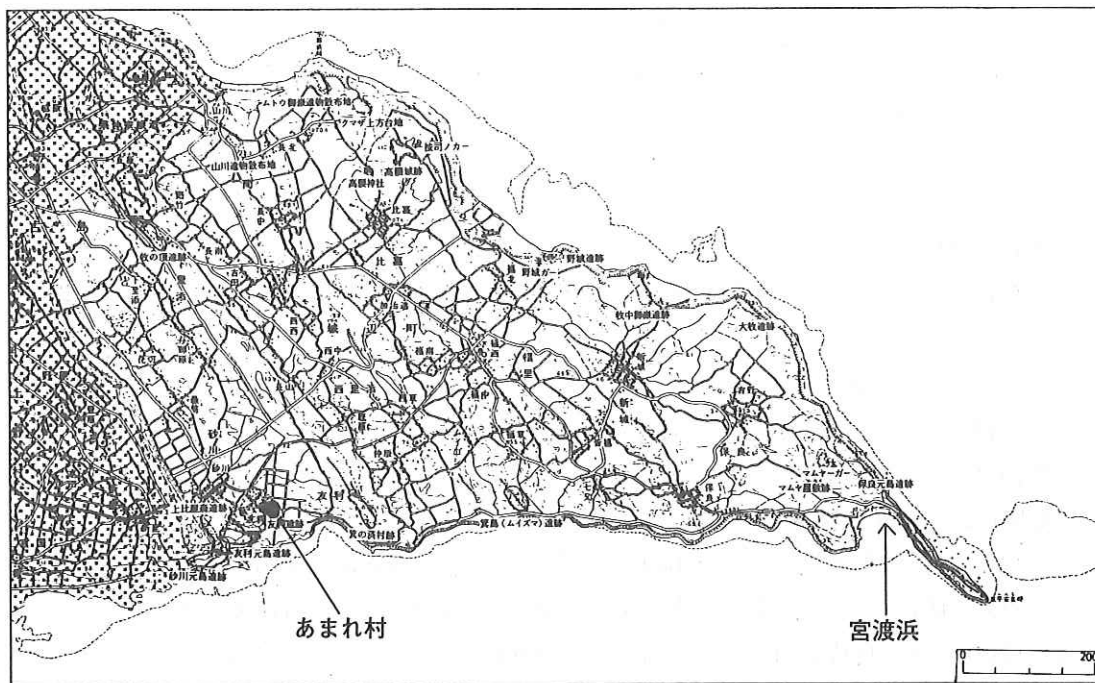
(『平良市史』第三巻資料編1 前近世より。但し句読点および濁点は筆者が付した。)

1700年初め頃、古老から聞き取りしたのであろう嶺間御獄の伝説である。城邊(ぐすくなぎ)四ヶ村とは宮国・新里・砂川・友利村を指す。ここにいう四ヶ村とは現在の集落ではなく「乾隆の大波」以前の集落で、現在は元島遺跡となっている。

友利村の後(北東)にあるあまれ山の下にあった小さな弧村は津波で滅亡し荒原となった。あまれ大津かさ(大司)という女性が一人だけ助かり、あまれ山の岸(がけ)の上に粗末な小屋を建て住んでいた。その頃、平安名崎の宮渡浜に漂着した大和人は、大津かさに出会い夫婦となり子孫繁昌した。それであまれ村は始めて村立することになったそうだ。嶺間山は夫婦の住み処だとの伝えもあり崇敬されている。ところが今はあまれ村は廃村となっている。

この伝説にはあまれ山と嶺間山が出てくる。あまれ山に住んでいた大津かさは大和人と結ばれて嶺間山に移り住んだともとれる。それで「あまれ御獄」ではなく「嶺間御獄」というのだろうか。それともあまれ山と嶺間山は同じ山なのだろうか。この伝説から知り得ることは、①津波からのがれるためか、あまれ山の上に居住したこと。②あまれ村は宮古人と大和人の子孫で構成されていること。③村人は村立に貢献した夫婦を神として御獄に祀り崇拝したこと。④あまれ村は廃村となったこと。などである。

平安名崎の宮渡浜とあまれ村のあったとされる嶺間御獄まではおよそ九キロの距離がある。その間大和人は村人の誰にも会っていないことになっている。集落はなかったということなのであろう。果たしてそうであらうか。



第1図 あまれ村と平安名崎の宮渡浜

あまれ大津かさと大和人の出会い、慶世村恒任著『宮古史伝』（1927年、以下『史伝』と略す）によれば、「愛養して暮らしていた一匹の犬」が仲立ちとなっている。漂着した大和人は砂浜に犬の足跡を見つけた。人里のある証であるとよろこび足跡をたどりアマリ山に行き、アマリ大司と夫婦となり、子孫繁昌した。

稲村賢敷著『宮古島庶民史』（1957年、以下『庶民史』と略す）も「一疋の大きな牡犬」の足跡をたどるのは同じであるが、次の問答が加えられている。倭人は女の話で大津波のあったことを聞き、「お前の夫は居るか」と尋ねる。女は「妻の夫は座れば高く、立てば低いという変わった者である」と答える。倭人は直ちにそれが犬であることを知り。剣を抜いて犬を切り殺した。倭人と女は夫婦となり、子孫繁昌したそうである。

女と犬の伝説について『史伝』は「此の由来は永い年月の推移に伴い筋を変じて民間に伝えられ、彼のアマリ大司と犬と交接して子孫が出来たとなし『宮古人は犬の子』という一種の侮蔑の言を生んだ」と解説している。

一方、『庶民史』は「この『あまりふあ』伝説を強いて曲解して、宮古人は犬の子だ等という考えは余程間違っている」と憤慨し、「犬も支那では倭人のことを狗奴等くぬ等といって悪口するから、狗奴の子だというので支那人式に悪口するなら別である」という。

ある津波で滅亡した村を再興する過程でその協力者に“大和人”と“一匹の牡犬”が登場している。『御獄由来記』には一匹の牡犬は登場しないのにどこから伝えられてきたのだろうか。あるいは由来記の編集段階でもこの伝説は伝えられていたのであろう。女と犬では誤解を招きかねないと編集人の配慮から割愛されたのかもしれない。

後述するが、砂川村上平屋（うへひや）も津波に襲われる。村を再興する協力者として竜宮の命を受けた「かがやくばかりの美人」があらわれ子孫繁昌する。美人は天女あるいは仙女ともいわれ“むまの按司”と称している。嶺間御獄の伝説とは対照的である。津波で生き残ったのは女性と男性、村を再興する外来者は男性と女性というように。外来者（富をもたらす）は天降りではなく、海からやって来たというのは共通項である。このことから考えても嶺間御獄の伝説が「神代」という領域とはかけ離れているように見える。いずれにしても外来者というインパクトが宮古の歩みに不可欠であることを伝えている伝説の一つであろう。

宮古の14世紀は集落が急激に増える時期であるが、滅亡した集落も少なくない。当然のことながら外来者の出入りは予想に難くない。あまれ村の村立一廃村もこの頃に想定されよう。

二、伝説の大津波

いわゆる「宮古島旧記」には大津波の伝説が五話収録されている。①嶺間御獄（御獄由来記）、②上平屋御獄（雍正旧記）、砂川村佐阿称大氏仙女に逢ふ事（宮古島記事付次）、③多良間島立始由来の事（宮古島記事）、④伊良部下地という村洪濤にひかれし事（宮古島記事仕次）、⑤久場嘉按司の女子普門好善の事（同前）の五話で、②の二つは同じ内容である。①は前述してあるので、②以下について津波に関する点を中心に概略し、津波の時期、時間、規模についてまとめることにする。

②上平屋（うへひや）御獄

男女神天てくこ・天の不なさらと唱。

男天てくこ、女天の不なさら夫婦は砂川村上平屋という所に住んでいた。男子さあね大ち(佐阿称大氏)が七歳の頃他村に遣わされた時、大津波が起り村中の人家は残らず流された。孤児となったさあねは喜佐真按司に養育される。さあね15・6歳(二八ばかり)の頃、みなこぎ浜で沖の方より小舟でやって来たむまの按司と出会い夫婦となる。父母の旧跡上平屋を住み処とし、男子七人女子七人を設け村を再興する。むまの按司は龍宮の命を終ったとして津波から免かれる祭事を伝えて海中に消えた。村中、中古までこの祭祀をやっていたそうだ。

③多良間島立始由来の事

兄は伊地之按司、妹は不なさかやという兄妹が仲筋村長底原という所で畠仕事の際中、南海より大濤(浪)が押し寄せたので、高嶺という山に登り命を救われた。この津波で島中の人家は残らず流された。兄妹は夫婦となり子孫繁栄して島の立始めとなったと言いつづけている。伊地之按司の末裔は土原之豊見親という。

④伊良部下地という村洪濤にひかれし事

伊良部島下地村の獵師が人面魚体の“よなたま”を釣りあげた。獵師は炭をおこしあふりこによなたまをのせて乾かした。その夜、隣家の子が泣き出し伊良部村へ行こうと叫ぶ、あまりの泣き声に外に出た母親は、「よなたま、よなたま何で帰るのが遅いか」、「今あらすみの上へのせられ半夜もあふり乾かされている。早く屏をやって迎えさせよ」との声を聞き、身の毛もよだち伊良部村へと急いだ。翌朝下地村にもどると村中残らず流されていた。村の跡は残っているが、その後村の再興はなかった。

⑤久場按司の女子普門好善の事

嘉手苅の主久場嘉按司のひとり娘普門好善は、琉球人玉城と夫婦となり男子を設けた。普門好善は夜泣きする子に「流浪人の子、何で夜泣きするのか」と言ってしまった。たまたま八重山島から帰った玉城はその言葉を聞き、腹を立てて子を奪い取り船出した。好善は思いもかけない出来事に泣きふし「わが身も島(村)も諸共にほろぼし給へ」と、天を仰ぎ地に伏して恨んだ。その時、大波が大山の崩れるかのように鳴り響き、東南の海端にあった村々をのみこんでしまった。「たとへ好善が願ひたれいとて忽波濤の寄り来る謂なし」と付け加える。いずれにしても大波が襲来し村々を洗い流したということである。

大津波に関連する五つの伝説をまとめると下表のようになる。

集 落(村)	時 期	時	規 模	備 考
①あ ま れ 山	神 代	夜	一村荒原となる	大津かさ・大和人で村を再興
②砂川村上平屋	神 代	昼	村中の家残らず失う	さあね大ち・むまの按司で村を再興
③多 良 間 島	上 古	昼	島中の家残らず失う	伊地之按司・不なさかや兄妹で村立
④伊良部下地村	むかし	夜	村中残らず失う	村は再興されず。村の跡形あり
⑤久 場 嘉 城	むかし	夜	海端の村々失う	普門好善と琉球人玉城

伝説による大津波が宮古に襲来したのは何時頃か。18世紀の旧記編集者によると、①と②は神代、③は上古、④と⑤はむかし、というように表現されている。『記事付次』では④伊良部下地村、⑤久場嘉城の津波の話に続いて②砂川村上平屋については「おなじころにありけん」と言うているので、②④⑤は同時期に起った津波と見られる。その時期は「神代」と見るべきであろうか。前述の想定によれば、神代とは伝承に残る豪族の抗争以前、すなわち14世紀以前と考えられる。

同じ頃であろうという②④⑤の津波はどの時間に起きたのであろうか。④はよなたまを釣り上げた日の夜中であらう。⑤は玉城が八重山島からもどった日の夜である。②はさあねが他村に遣わされた日で夜ではないと思われる。②と④⑤では津波の起きた時間の伝承に差異が生じている。①と③はどうだろうか。①はあきらかに或夜である。③は兄妹の畠仕事申だから夜とは思はれない。津波の伝承からすると②と③は朝一昼、①④⑤は夜の襲来である。伝説の津波は二度あったと考えるべきであらうか。その決め手は何もない。③と⑤では津波が南方あるいは東南方から襲ったらしいことがわかる。時間の表現に差異は見られるものの③と⑤は同じ津波らしいことをうかがわせる。果たしてどうであらうか。

さて津波の規模はどの程度のものであったか。①はあまれ村が荒原と化す状況である。②は砂川村すべての家が引き流される。③は多良間島の家がすべて引き流される。④は下地村すべてが洗いつくされる。⑤は海端にあった村々が全滅した状況である。この津波伝説は南海岸の友利、砂川、嘉手苅、西側の下地島、およそ90キロ離れた多良間島までその被害は及んでいる。「宮古島旧記」に収録されていないが南海岸には新里、宮国の二ヶ村もすでに存在していたので、同じような被害にあったのではないだろうか。1771年の乾隆の大波ではその惨事が記録されている。伝説の大津波で村々は壊滅的な状況にあったものの乾隆の大波に遭遇するまで同じ場所で村々は存続し続けている。

では、伝説の津波は何時頃起きたのか。

『庶民史』は次のように考察している。『那覇由来記』や『琉球国旧記』にあるろくろを始めた薩州国分の人鮫島太郎兵衛は那覇親見世に旅駐し、先島にも往来し、宮古女を娶って一男を生む。後球民となり名を安里掟という。妻子と離れて普門寺村に住居し、後若狭町に移り、ろくろを始めた。ろくろの伝来者鮫島太郎兵衛が『第二宮古島旧記』（宮古島記事付次）にある普門好善の夫玉城なるものと同一人であるとすれば、彼が那覇普門寺に居住し、宮古・八重山諸島に往来し、宮古女を娶って一人の男子を出生したということについては不思議にその記録が一致してくる。と考察している。

そして、普門寺の建立が尚泰久王の景泰年間（1450-56）であることから、久場嘉城跡の物語は、景泰、天順年間（1460年頃）のことであらうと思われる。と推論している。すなわち、大津波の来襲は1460年頃と稲村賢敷氏は考えている。

砂川明芳氏は「第六章 古宮古の大津波」（『宮古島郷土史考』第四部。1986年）で、大津波の時期の考察を更に進め、『李朝実録』に収録されている朝鮮人が宮古に漂着した記録に注

目している。世祖8年（天順6年 1762）の条である。

肖得誠等八人今年正月二十四日羅州発船。二月初四日漂到琉球国彌阿槐島。島人載酒肉来饋引留此島。島人輪辨供給。島長二息、廣一息許。二月大麥已収刈。小麥皆熟。瓜茄亦已結實。至四月十六日附趨琉球国商船、本月二十七日到本国。国王於宮内南行廊按置。日日召見厚饋。七月六日發還。

〈中略〉

一、初到彌抄槐島。本島人與隣近屈伊麻島、日南浦島、時麻子島、干甘島、五島人民互相往来飲酒。每相往来必請肖得誠等厚慰之。

（講座テキスト「李朝実録 琉球史料 第一集」球陽研究会発行より）

彌阿（抄）槐島（宮古島）に漂着した朝鮮人八人は二ヶ月余滞在し、酒肉等の厚いもてなしを受けている。しかも宮古島、屈伊麻島（来間島）、日南浦島（伊良部島）、時麻子島（下地島）、干甘島（大神島）の島民が輪番で至れり尽せりの接待である。なにしろ彼らは「引き留め」られたのだから。あるいは漂流民に対するあたりまえの対応だったのかも。

ともあれ、1462年当時、下地島には、民が住んでいた。すなわち集落があった。前述の下地島における“よなたま伝説”によれば、大津波来襲後は村立されなかったと伝えている。これらの記録、伝説をふまえて、砂川明芳氏は大津波の時期を次のように想定している。

「普門好善のことから、琉球国由来記の宮古女に一人の男子を得た鮫島六郎兵衛と関わりを考え、上平屋山のむかしがいつだったかを見、下地島のキドマリ村に行つて酒を飲んだ朝鮮漂民の顔を想い画いて、結局1470年ごろに、その大津波はあったのだろう」と。更に「宮古の南岸を襲った大津波は、多分石垣島をも襲ったのではあるまいか。その宮古の大津波は、1771年の「明和の大津波」とよく似ているからである。宮古の南の海岸低地に在った村々がひき流されており、下地島も洗われている」と推論を發展させている。

『庶民史』の想定した1460年ごろ、『郷土史考』の想定した1470年ごろ、どちらも15世紀後半に伝説の大津波があったことでは一致している。鮫島六郎兵衛と朝鮮漂民の記録はその蓋然性の高いことが知れる。想定された大津波の時期には、前述の②砂川上平屋④下地島⑤嘉手苜が襲われている。①あまれ村と③多良間島について言及はないが、同じ大津波なのだろうか。

三、大津波と遺跡

伝説の大津波は15世紀後半の半ば頃に起つたとの想定は『庶民史』と『郷土史考』で見た通りである。この大津波の痕跡は考古学で証明できるのだろうか。

当時の集落（村）は海岸よりの低地帯に形成されており、現在は元島遺跡とし残されている。東側から友利、砂川、新里、宮国の元島遺跡で1771年の乾隆の大波で大きな被害を受けた村々である。この四ヶ村の他、池間、前里、仲地、佐和田、伊良部、仲筋、塩川、水納の計12ヶ村がその被災村である。石垣島の南東方を震源地とすマグニチュード7.4（推定）の

地震によって南岸の村々が大津波に襲われた。宮古島の南岸、池間島、伊良部島、水納島すべてに被害は及んでいる。

伝説の大津波も南海岸から押し寄せたと見られる。乾隆の大波との違いは久場嘉城（旧跡）のある地域（のちの嘉手苧村）が被災地でなかったことである。いわゆる「宮古島旧記」に記載された大津波による被災地はあまれ村、砂川村上平屋、久場嘉城、下地島の下地村、多良間島の五ヶ所である。伝説として記載はされていないが、宮国、新里、友利の各村もその被災地であったことが予想される。このような地域にある遺跡の発掘調査は大津波の痕跡を確認することはできたのだろうか。遺跡の発掘調査概要の一部は次の通りである。

1、宮国元島遺跡

1978年から79年にかけて県教育委員会文化課によって発掘調査される。14世紀から17・18世紀の集落遺跡で、乾隆の大波後に後方台地の現在地に村を移動する。竪穴住居跡一棟が検出されてはいるが、津波の痕跡を確認するには至っていない。伝説の大津波時には集落として存在している。

2、砂川元島遺跡

1974年から75年にかけて青山学院大学、1997年には城辺町教育委員会によって発掘調査される。14世紀から17・18世紀の集落遺跡で、乾隆の大波後は後方台地の現在地に村を移動する。住居跡と想定される敷石遺構が検出されているが、津波の痕跡は確認されていない。その後の発掘調査で、柱穴や炉跡は確認されているが、津波の痕跡の確認には至っていない。発掘された場所が標高約15メートル内外なので津波が上ったかどうかにもよる。伝説の大津波時には集落として存在している。

3、友利元島遺跡

1987年に県教育委員会文化課、1995年に城辺町教育委員会によって発掘調査される。14世紀から17・18世紀の集落遺跡で、乾隆の大波後に後方台地の現在地に村を移動する。住居跡は確認されていないが、道と想定される石敷遺構が県文化課と城辺町教委の調査で確認されている（写真1）。乾隆の大波の痕跡も初めて確認されている（写真2）。発掘された場所の標高は約10メートル内外である。Ⅲ層の遺物包含層を覆うように黄白色砂層が堆積し自然貝や大小の礫が混在している。この堆積層は奥（北側）の方には見られないので、遺跡全体を覆っている層ではない。この被覆した黄白色砂層はまぎれもない乾隆の大波の結果と見られる。伝説の大津波の痕跡についても注意して発掘されたが、確認するに至っていない。大津波後も同じ場所に村を再興していることを考えるとその痕跡を見出すのは困難と思われる。乾隆の大波ではその後始末が行き届かず残された結果として見る事が出来るだろう。

4、友利遺跡

1992年から93年にかけて城辺町教育委員会によって発掘調査される。友利遺跡は友利元島遺跡の北方台地に形成された14世紀から15世紀頃の集落遺跡である。住居跡と想定される遺構が一棟検出されている。石灰岩上を滑らかにして注穴が八コ穿たれている（写真3）。伝説

の大津波も集落として存在している。

四、友利遺跡とあまれ村

友利遺跡は標高30～50メートル内外の石灰岩台地に形成された集落遺跡である。北側は若干崖を呈しているが、南側は緩傾斜面となり、西側は小さな石灰岩丘陵となっている。現在は丘陵も削られ住宅が建っている。遺跡は元島集落の後（北東）に位置し、およそ125～130平方キロの規模である。北側崖に対峙するように小さな丘陵があり、嶺間御嶽が南に向けてつくりられている。現在、遺跡を分断するように拡幅整備された県道友利線が友利元島遺跡を通り、イムギヤー沿いの県道保良一上地線（通称一周道路）に接続している。

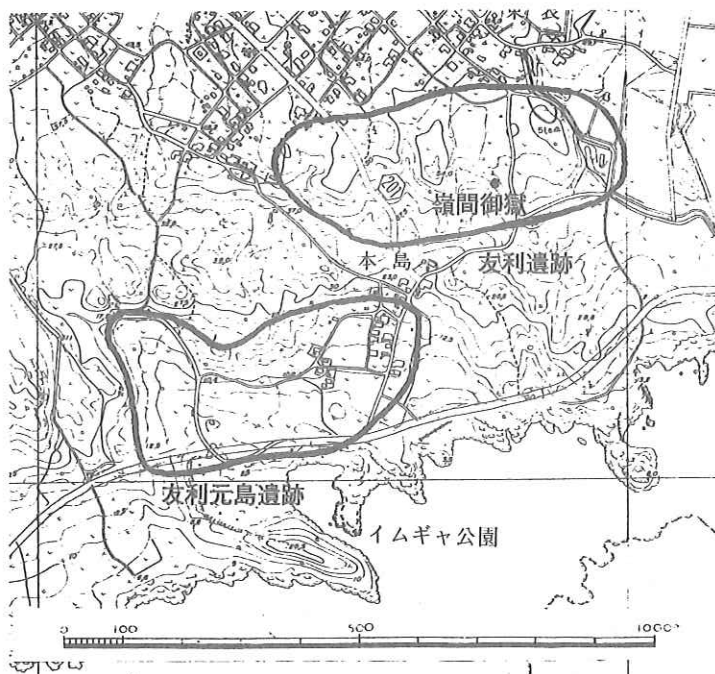
遺跡の北西側にある石灰岩は人工的に削られ上面が滑らかに仕上げられている。その面に八個穿たれており柱穴と想定される。平面プランはやや台形ぎみで南北1.7～2.0メートル、東西1.5～1.8メートルぐらいである（写真3）。10センチ程度の表土で覆われていた。柱穴には時期を特定できそうな陶磁器などがはまっておらず、住居跡と想定される遺構の時期決定には至っていない。柱穴らしきものは他にも確認されたが平面プランを決めることはできなかった。

遺跡からは、宮古で生産された鍋形や壺形の土器などが多量に出土する。外来の陶磁器には白磁、青磁、青花（染付）、褐釉陶器の他、徳之島で生産されたと見られるカムイ焼（従来類須恵器と呼称されてきた）などが出土する。人工製品としては他に貝斧（写真4）や貝錘（有孔製品ともいう）の貝製品。尖頭器（八重山の遺跡から数多く出しその名称で報告されている）などの骨製品（写真5）、石斧や敲石（石材は八重山産とされる）などの石器、それに勾玉（写真6）、小銭などが出土する。

陶磁器には13世紀頃とされる玉縁口縁の白磁碗も見られるが、その多くは14～15世紀頃とされる弦帯文碗、雷文帯碗、線刻蓮弁文碗、陵花皿などが見られる。友利遺跡は13世紀頃の可能性も残しているが、その主体となる時期は14～15世紀頃として考えられる。友利遺跡の南西方の低地にある友利元島遺跡は時期的に共存していたことになる。元島遺跡は近世まで存続した集落遺跡なので、あるいは友利遺跡は吸収されたのかも知れない。その理由は判然としないが、友利遺跡内にある嶺間御嶽を友利村の住民も崇拜していることから予想される。嶺間御嶽の女神はあまれ不ら、男神は泊主として崇拝しているが、口碑によれば大和神かんか主と称され鍛冶神という。

あまれ村については前述した通りであるが、ここでは遺跡との関連でとらえ、伝説の津波について再度見ることにする。

あまれ山の下にあって津波で滅亡したと伝える孤村とはどのような集落か。問題はあまれ山の所在であろう。津波の難をのがれた大津かさはあまれ山に居住し、漂着した大和人と結ばれ、あまれ村を立てた。後の村人は夫婦の居住地と伝える嶺間山に御嶽をつくり祀ったという。あまれ山と嶺間山は同一名称のようにもとれるし、夫婦はあまれ山から嶺間山に移動した



第2図 元島遺跡および友利遺跡と嶺間御嶽

ようにもとれる。嶺間御嶽はあまれ大津かさを祀ることから、「あまれふぁ御嶽」とも呼ばれる。村は津波で滅亡したというから海岸近くにあったことが想定されることから、あまれ山も海岸近くにあったのであろう。御嶽はあまれ御嶽とは呼ばれず嶺間御嶽として伝えられたためか、後世の人が嶺間山と称したのではないだろうか。

嶺間御嶽がつくられた嶺をあまれ山だと理解すれば、滅亡した孤村は御嶽の前方南側にあったことが推測される。友利遺跡内である。その地区

は標高40メートル内外である。発掘調査はされていないので津波の是非については言及できないが、元島遺跡が標高15メートル内外に比べれば高所に位置する。

津波後、大津かさはあまれ山の岸(がけ)の上に小屋を建てて住んだと伝えるが、発掘された住居跡遺構と関係しないのだろうか。住居跡の大きさ(約1.7×2.0メートル)からすれば小屋とは言い難いのだが。平安名崎の宮渡浜に漂着した大和人は犬の後を追ってあまれ山に住む大津かさに出逢ったと伝える。宮渡浜からあまれ村と想定される友利遺跡までの間には(第1図)に示したように、箕島(ムイズマ)遺跡と箕の隅(ムイヌスム)遺跡が石灰岩丘陵上にある。すなわち、箕島(村)、箕の隅村を経てあまり村にはたどり着くことになる。この二つの遺跡も陶磁器から推して14～15世紀頃には存在していた集落である。「あまれふぁ伝説」はどのようにして伝えられてきたのか。『御嶽由来記』はどうかその一部分を記録したものであらうと思われる。津波という要素が村を滅亡されたとする伝説は他の地域にも残されている。あまれ山の津波は、次のようにも考えられることを示しておきたい。

「多良間島立始由来の事」に関して言えば、13世紀以降の遺跡として塩川井、嶺間の遺跡、14世紀以降の遺跡として土原、天川の遺跡が知られている。大津波で村中残らず流された後に兄妹によって多良間島は立始めたと伝えるから、古く考えれば嶺間遺跡が立始めということになるか。友利遺跡も13世紀以降である可能性は残されているので時期的には一致する。

津波の難をのがれた多良間島の伊地之按司・不なかさや兄妹の後裔は土原豊見親であると伝えられているので、兄妹が村立てしたのは土原遺跡であらう。その中にある土原御嶽には土原豊見

親の先祖が祀られているという。友利遺跡にある嶺間御嶽でもあまれ村を村立てした二人が祀られている。津波後に新たに村立てしたと伝える多良間の土原村（土原遺跡）、あまれ村（友利遺跡）は14世紀以降の遺跡である。このことは想定された伝説の津波の時期と相応しないことになる。すなわち想定された時期の津波が多良間、及びあまれ村を滅亡させたとなれば、15世紀後半以降に村立てされたことになり遺跡の時代を考えれば不合理が生ずる。

このように考えると、近世以前の古い宮古には二つの大津波があった、かも知れないと思う。一つは14世紀前後に多良間、あまれ山を襲った津波、もう一つは15世紀後半頃に下地村、砂川村上平屋、久場嘉城を襲った津波の二つである。「宮古島旧記」には時代の違う伝説の津波が二つ記録されたいことになるのだが。

おわりに

いわゆる「宮古島旧記」に記録された伝説に考古学の成果を重ねて「あまれ村」と「伝説の津波」の考察を試みた。結果的には資料不足であまれ村の前身とされる「孤村」を特定するには無理があった。ただ、伝説は事実の一部を伝えているとの認識にたてば、その情報から友利遺跡の範囲内らしいとの検討は得られた。同遺跡には標高54.8メートルと標高51.8メートルの高所が二つある。夫婦の居住地と伝える嶺間御嶽はその間にある。標高42メートル前後である。友利遺跡は友利元島遺跡よりは高台に立地し、最も近い海岸線より35メートルぐらい内側に位置する。この状況は津波で滅亡した孤村の伝説が疑わしいとの側面をもっている。

多良間島立て伝説と土原遺跡との時期的な関係から、伝説の津波が襲来した時期を14世紀前後であろうと想定した。この津波はあまれ山の下にあった孤村を滅亡させた同じ津波であろうと見た。土原遺跡、友利遺跡は14世紀ごろの遺跡と想定されていることから見て、伝説の津波後の集落と考えるに至った。下地島の下地村、久場嘉城、砂川村上平屋を襲った伝説の津波が15世紀後半頃に想定され蓋然性が高いので、遺跡の時期の関係からもう一つの津波を想定するに至った。

<参考文献>

- 1、講座テキスト『李朝実録 琉球史料 第1集』球陽研究会（1971年）47～50頁
- 2、東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』（1969年）103～106頁
- 3、慶世村恒任『宮古史伝』（1927年）11頁
- 4、稲村賢敷『宮古島庶民史』（1972年）51～52頁
- 5、砂川明芳『宮古島郷土史考』第4部（1986年）85～99頁
- 6、盛本勲「実証された“明和大津波”友利元島遺跡」（『沖縄タイムス』1987年11月4日～11月6日）
- 7、『友利元島遺跡－発掘調査報告書－』（2004年）城辺町教育委員会
- 8、友利遺跡の発掘報告書は未刊、発掘遺物を参考にした。



写真1 友利元島遺跡の砂利石道？（中央右）この石道の上
に大波の痕跡が堆積していた

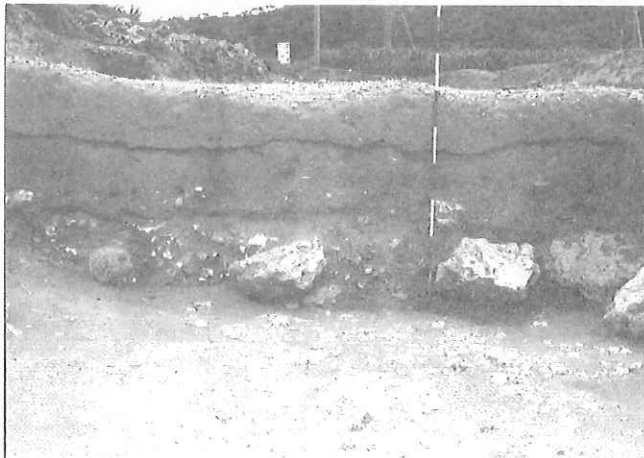


写真2 乾隆大波の痕跡（Ⅰ層：客土 Ⅱ層：表土
Ⅲ層：黄白色砂層 Ⅳ層：遺物包含層）



写真3 友利遺跡の住居跡



写真4 貝斧の出土状況（友利遺跡）



写真5 「尖頭器」の出土状況（友利遺跡）



写真6 勾玉の出土状況（友利遺跡）